

中学校家庭科における地域教材についての家庭科教員の意識

Teacher's Consciousness on Local Life Culture as Teaching Material in Junior High School Homemaking

平松 倫子 倉盛 三知代

(和歌山市立河北中学校) (和歌山大学教育学部)

Noriko HIRAMATSU Michiyo KURAMORI

2004年10月8日受理

I 緒言

近年、「スローライフ」「スローフード」という言葉をよく耳にする。これは、「ファーストフード」に相對する言葉としてイタリアで誕生したものである。「スローフード」とは、自分たちの食べているものをもう一度見つめなおし、地元の安全な良質の食材で料理を作り、伝統的な料理や味を受け継いでいこうというもので、日本では「日本スローフード協会」が、京野菜などの地域の特色のある食材、郷土料理、地酒などを見直そうと活動している。また、食材だけではなく、衣服や住居などの生活そのものも見つめなおし、「地域」や「地元」を意識し、受け継いでいくものが「スローライフ」である。それはもう一度自分たちが生活している地域を見つめなおそうというもので、今まさにその時代が訪れていると考える。

現在の中学生は様々なストレスをかかえている。深刻ないじめ問題、青少年犯罪低年齢化、不登校、受験戦争と彼らを取り巻く環境は決して良好とはいえない。若者たちが「キレる世代」といわれ始めて久しいが、今なお「キレる世代」は続いていると私は感じる。そんな中で、「ゆとりある教育」が重視され、学校週5日制が始まったが、はたしてゆとりが生まれているであろうか。確かに、登校する日は減少した。しかし、「ゆとり」とは単なる時間を表わすものではない。精神的なゆとりがなくては意味がないのである。宮坂¹⁾は「せっかくの土曜日、部活動の特訓の場になったり、無理やりに受け皿を作って次から次へと子どもを追い立てることは良いとは思わない。が、教師と親が連帯して自主的なプログラムを作りだしたり、地域の親たちや他の人々と連携して文化創造的にアクションするすばらしいチャンスがそこにあるということは間違いない²⁾と論じている。宮坂の言う「ゆとり」こそが「スロー」なのではないか。そして生徒が地域で活躍する場を作ることが、彼らが「立ち止まってみる」きっかけになるのではないかとと思われる。そのきっかけを与えてやることは重要な課題である。

平成14年度の中学校指導要領の改訂で、技術・家庭の内容の中に選択領域ではあるが「地域の食材を生か

した調理…」、「地域の人々の生活に関心を持ち…」などの記述がなされている。社会全体が地域の持つ力を認識し、教育の立場からも地域の力を必要としている。そうした視点から、教育の場での地域教材のあり方を検討したいと考えた。家庭科における「地域」の教材化については柳、田結庄、の先行論文^{2),3),4),5)}があるが、地域素材の導入についての家庭科教師の意識調査は少ない。そこで、今回、和歌山県下の中学校家庭科教師を対象に調査を行ったので、その一部を報告する。調査の目的は家庭科教育に地域素材をどう取り込んでいけるか問題点を明らかにすることであり、さらにその教材化に向けての検討を試みたいと考えている。

II 研究の枠組み

調査の枠組みは、図1に示す通りである。

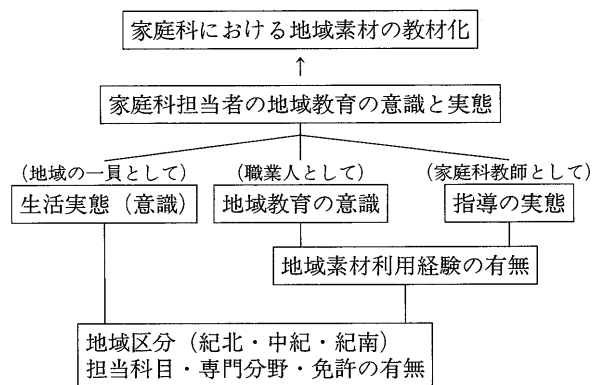


図1 調査項目の関連図

一人の生活者としての生活実態、および家庭科教師としての地域素材についての意識と実態を把握するため次のような項目を調査内容とした。

(1) 生活者としての生活実態

家庭での行事実施傾向、居住地域と勤務地域での行事参加

(2) 家庭科教師としての地域教材についての意識と実態

地域素材に対する意識や経験、地域素材の種類や利用方法

本報告の目的にそって、次のような仮説をたてた。

- 仮説1 学校所在地域より自分の住居地域の行事のほうに参加率が高い。
- 仮説2 地域の行事への参加率が高い者は、地域素材への関心も高い。
- 仮説3 家庭での行事の実施率が高い者は、地域素材への関心も高い。
- 仮説4 地域素材への関心の高い者は、地域素材を利用した授業の経験がある。
- 仮説5 地域素材への関心の高い者は、家庭科で地域素材を扱うべきだと考えている。

III 調査方法

調査対象は和歌山県内の各中学校で家庭科を担当している全教員である。調査時期は2002年7月中旬～8月下旬、自記式質問紙法により調査用紙を配布し、留置後回収した。配布数143部のうち回収数90部、回収率は63.7%であった(表1)。集計にあたっては、SPSSVer11.0とExcel2002を使用し、有意差はX²検定により行った。

表1 回収結果

	配布数	回収数	回収率
和歌山市地方	22	14	64%
海南・海草地方	11	5	45%
那賀地方	10	8	80%
橋本・伊都地方	15	10	67%
有田地方	13	5	38%
日高地方	28	23	82%
田辺・西牟婁地方	27	17	63%
新宮・東牟婁地方	17	8	47%
合計	143	90	63%

IV 調査結果および考察

(1) 調査対象者の属性

年齢については55～60歳と30～34歳が4～7人と極端に少ないもののその他の年代は15人前後とほぼ同率である。性別については圧倒的に女性が多く、男性はわずかに3.3%(3人)である。結婚については既婚者73.3%(66人)、未婚者24.4%(22人)で、既婚者は未婚者の3倍である。子どもの有無については、子どものいないものが30%、男女両方約30%、男児だけ、女児だけがそれぞれ17.8%と18.9%である。高齢者との同居については同居44.4%(40人)、別居53.3%(48人)であった。

(2) 「地域素材に対する意識・実態」と教師の居住地

地域素材に対する意識・実態について(①自然観察会や環境調査への参加②公共施設の利用とその頻度③ボランティア経験④地域の人との交流会⑤地域の特産物の知識⑥地域行事への参加)の6つの設問をし、教

師の居住地{勤務校と同じ(以下勤務地域と呼称する)か勤務校のある地域以外の地域(以下居住地域と呼称する)か}との関連を検討する。

①自然観察会や環境調査への参加について

勤務地域でも居住地域でも参加経験が無いが90%以上を占め、居住地域による差異は認められない。どちらも(2回以上参加した)は1人だけで、地域観察への関心の低さが伺える。

②公共施設の利用とその頻度について

図2より居住地域では「ある」と答えた人が74.4%いるのに対し、勤務地域では54.4%にとどまっており、勤務地域より居住地域での利用率が高い。

また、利用頻度については図3の通りで、居住地域では図書館の利用頻度が多いが、勤務地域では他に比べて公民館や児童館を利用したことがある人のほうが多くなっている。

これは、公民館を利用して、地区懇談会や子ども会などの学校関連行事がよく行われるためではないかと考えられる。特に居住地域の図書館利用者は公共施設利用者のほぼ全員にあたり、少なくとも年に2、3回以上利用している。

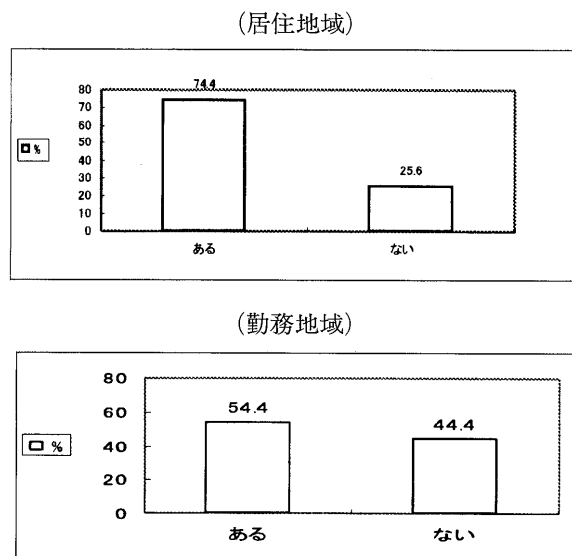
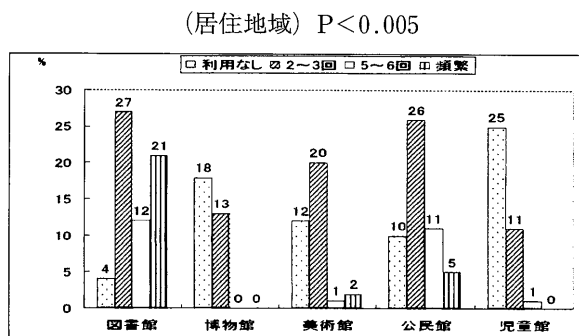


図2 公共施設利用と教師の居住地



(勤務地域) P<0.01

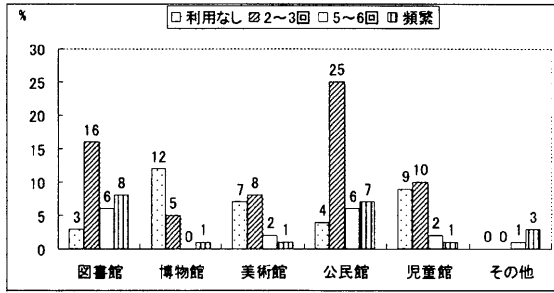


図3 利用頻度と教師の居住地

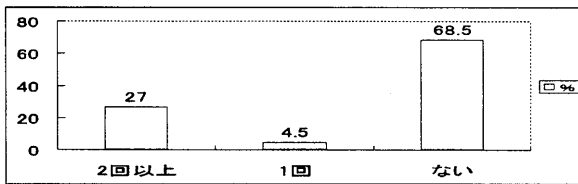
③ボランティア経験について

居住地域での経験者が37.1%あるのに対し、勤務地域では、26.7%と居住地による若干の差がみられた。

④地域の人との交流会について

注目される点は、1回だけの交流経験者は勤務地域の方が多いが、2回以上の交流経験者は居住地域の方が多いためである。これは、交流会には居住地域の方に積極的に参加しているが、勤務地の学校行事などの交流会に1度は参加をしているということであろう(図4)。

(居住地域)



(勤務地域)

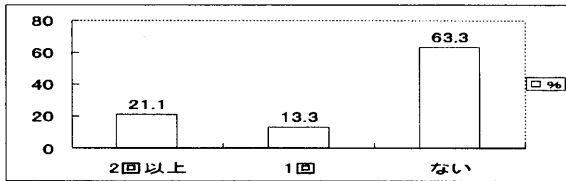


図4 交流会と教師の居住地

また、交流会の内容については、居住地域においては婦人部や地域主催のものが多く、勤務地域では育友会や保護者主催のものが多く見られ、中でも料理講習などの食に関するものが大変多く、約4割を占めていた。南部町の梅料理研究会による料理講習会や伊都地方の柿料理講習会などに、地域的な特徴がうかがえる。

⑤地域の特産物の知識について

勤務地域では80%、居住地域では90%のものが特産物を知っており、居住地域の方がより知られている。

⑥地域行事への参加について

「祭り」「清掃美化」「スポーツ」については、居住地

域での参加経験者が30%前後と多く、勤務地域では20%前後と低い結果であった。

(3) 家庭での年中行事とその実施状況

教師が、一人の生活者として「家庭行事」に関わり、実践しているかについて「行事食」、ロ「行事食以外の生活文化」、ハ「しつらえ」、ニ「先祖とのつながり」に関する30項目の家庭行事(表2)についてたずねた。

30項目の設問の中で最も多く実践されたのは「お雑煮を食べる」が100%、「年賀状を出す」が97.8%、「おせち料理を食べる」が92.2%、「鏡餅などを飾る」が88.9%、と日本人としてのお正月行事を一番大切にしていることがわかる。一方、外国から入ってきた文化といえるハロウィーンについては「ハロウィーンにかぼちゃなどを飾る」と答えた人は17.8%と低く、しかも、毎年経験する人は一人も無いが、クリスマスについては、「毎年する」と答えた人は、経験したことがある人を加えると、「クリスマスケーキを食べる」98.9%、「クリスマスツリーを飾る」91.2%、「クリスマスにプレゼントを交換する」が78.9%と高い数値を示しており、行事として定着していることが興味深い。これは、真部・橋本⁹⁾の先行論文の「全年齢層で高い実施率を示したものは、正月、大晦日、クリスマスであった」と一致する結果である。

項目別にみると、図5のように「先祖とのつながり」に関する行事を「毎年する」と答えたのは75.9%と一番多く、ついで「行事食について」が70.9%、そして「行事食以外の生活文化」が58.3%と続き、「しつらえについて」が40.6%と一番少なくなっている。(P<0.05)

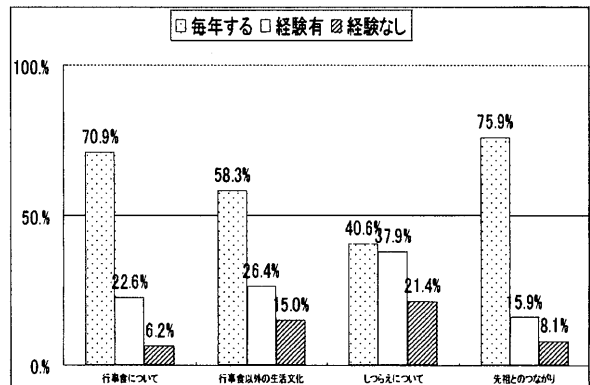


図5 年中行事の経験度 P<0.05

表2 家庭での年中行事

1 正月におせち料理を食べる	2 正月にお雑煮を食べる	3 1月7日に七草粥を食べる	4 節分にまき寿司やいわしや大豆を食べる
5 ひなまつりにちらし寿司などを作り白酒を飲む	6 こどもの日に柏餅をたべる	7 お月見にお団子をたべる	8 冬至にかぼちゃ料理を食べる
9 クリスマスにケーキを食べる	10 大晦日に年越しそばを食べる	11 お正月に初詣に行く	12 節分に豆まきをする
13 端午の節句に菖蒲湯にはいる	14 地蔵盆にお供えをしまつる	15 冬至にゆず湯に入る	16 クリスマスにプレゼントを交換
17 年賀状を出す	18 年末に家でおもちをつく	19 大晦日に大掃除をする	20 大晦日におせち料理をつくる
21 正月に鏡餅などを飾る	22 ひなまつりにお雛様を飾る	23 端午の節句に鯉のぼりや兜を飾る	24 七夕に笹飾りをする
25 お月見にすすきや萩を飾る	26 ハロウィーンにかぼちゃを飾る	27 クリスマスにツリーを飾る	28 春のお彼岸に墓参りをする
29 お盆に仏壇に仏様をお迎えする	30 秋のお彼岸に墓参りをする		

イ (1~10)、ロ (11~20)、ハ (21~27)、ニ (28~30)

(4) 「伝統行事」・「生活技術」と教師の意識

伝統行事を体験させたいかを尋ねると「強く思う」と「かなり思う」答えた人が88.8%あり、ほぼ9割の人が、年中行事などの伝統行事を体験させたいと考えている。また、伝統行事を伝承させたいかをたずねると、「強く思う」と「かなり思う」を合わせると、90%となり、これも、ほとんどの人が伝承させたいと考えている。

しかしその一方で、生活技術を十分教育していると考えている人は30%しかなく、生活の技術を十分体得させることができる教材の研究が必要とされる。(図6)

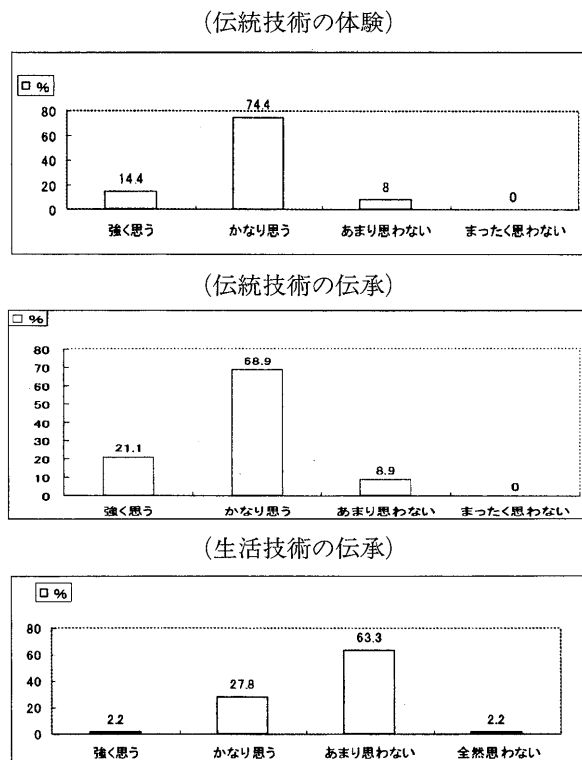


図6 伝統技術と生活技術 P<0.005

また、「伝統行事を体験させたいか」と「伝統技術を

伝承させたいか」についてクロスすると、どちらも「思う」と答えた人が8割以上おり(表3)、伝統行事も伝統技術もどちらも同じように伝えていきたいと考えていることがわかる。

表3 伝統行事と伝統技術

		伝統技術			
		強く思う	かなり思う	あまり	無回答
伝統行事	強く思う	12%	2%	0%	0%
	かなり思う	8%	64%	2%	0%
	あまり思わない	1%	1%	7%	0%
	無回答	0%	1%	0%	1%

(5) 地域素材と家庭科授業

家庭科の授業において地域素材をどう導入するかについて①地域素材への興味・関心②地域素材の利用経験③地域素材の利用目的④地域素材の利用方法⑤地域素材を授業で利用した感想⑥今後の授業での地域素材の活用⑦今後授業での地域素材の取り上げ方の7つの設問を行った。

①地域素材への興味・関心

図7に見るように、「地域教材に興味・関心がある」は26.7%と少ないが、「少しある」が61.1%いることから、あわせると87.8%となり、ほぼ9割が多少なりとも地域教材に興味・関心を持っているといえる。(P<0.005)

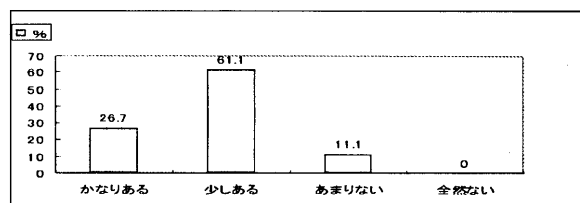


図7 地域素材への興味・関心 P<0.005

また、「全然興味・関心がない」と答えた人が一人もいなかった点も注目され、全体として地域教材に対してなんらかの期待がもたれているといえよう。

②地域素材の利用経験

図8からもわかるように、興味・関心があっても実際の「授業で地域素材を使ったことがある」は47.8%で、「使ったことがない」と同数となっている。「使ったことがある」人の中では「2回以上」が「1回」を上回っており、このことから、地域素材は使いにくいと思いがちだが、実際使ってみると手ごたえがあり、何度か使ったのではないかと考えられる。また、興味があるのに使っていないという人が38人おり、全体の42%を占めている。このことに注目し、その原因を追求したいと思う。

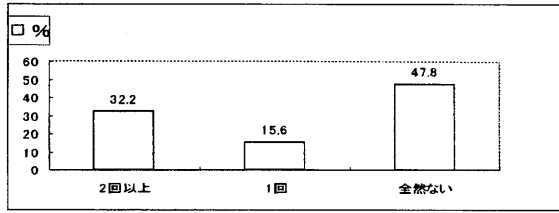


図8 地域素材の利用

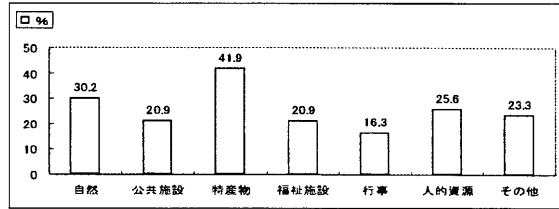


図9 授業で使った地域素材

図9より授業で使った地域素材は「特産物」を対象とした人が一番多く41.9%、ついで「自然」「人的資源」「公共施設や福祉施設」となっている。ここでも、行事などを取り上げた例は少なく、前所述べたように「行事を体験させたいと思っているが実現できていない」ことを裏付ける結果である。

③地域素材の活用目的

地域素材の活用目的をア、学習の場として イ、事象や人から ウ、対象として エ、自覚や誇り オ、将来の展望 の5つの選択肢を設定して問うた。全体的に見ると「自覚や誇り」「将来の展望」を目的として地域素材を利用した人は少なく、「対象として」「学習の場」「事象や人」という考えで利用した人が多かった(図10)。これを地域素材の種類とあわせて細かく見ていくと図11のようになる。

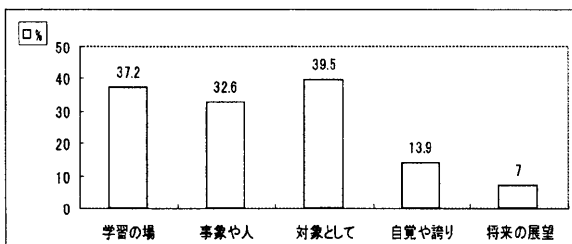


図10 地域素材の活用目的

お盆などの年中行事などであるが、これらは地域色が薄れており、年中行事などでは若干地域的な特徴が見られるが、特産物などに比べ地域を見つめさせる面が低いと考えられる。これらは授業を展開するための「学習の場」としての利用が多くなっている。それらに比べ、特産物は地域の特徴が大きく表われるものであり、地域の生活文化や歴史、現状といった地域独自の学習に効果的である。また、人的資源も地域について生の声が聞けるという点を目的として利用が多かったと思われる。「自然」は環境問題などの全国的な課題と、地域の特産物にもつながる地理的な要素があるので、「学習の場」や「対象として」の両方を目的として導入されたものと考えられる。

以上から、「公共施設」や「行事」は全国的に活用できる素材であり、「特産物」や「人的資源」はそれぞれの地域の特徴をより濃くふまえて活用できる素材であると考えられる。

④地域素材の利用方法

全体的に見ると、「体験」が最も多く、「見学」が少ない(図12)ことから、地域素材を学習する方法としては実際に体験させることが大きな意味を持っていると考えられる。これを素材の種類別にまとめたものが図13である。

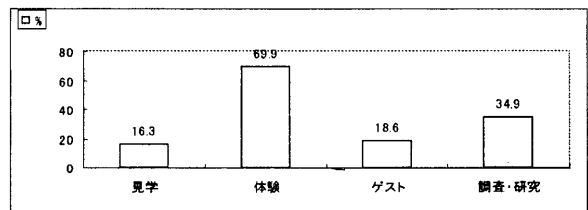


図12 地域素材の利用方法

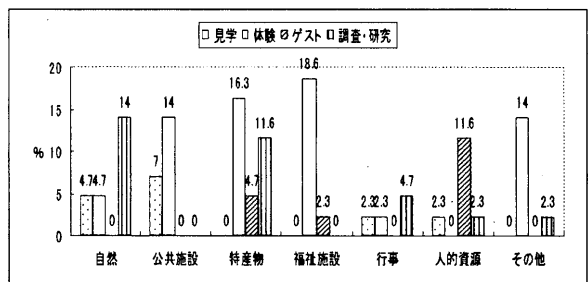


図13 地域素材の種類別利用方法

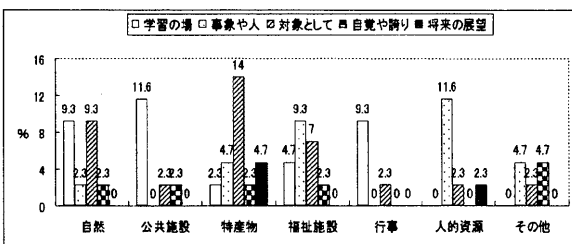


図11 地域素材の種類別活用目的

「福祉施設」「特産物」「公共施設」で「体験」を通しての学習が多く取り入れられ、「その他」の体験場所は「保育園」が多かった。「福祉施設」ではおそらく老人ホームでの介護や話し相手の体験、「特産物」では郷土食の調理実習や生産体験が主であると考えられる。

「人的資源」に関しては「ゲストティーチャー」を招き、「自然」に関しては「調査や観察」をするというのが一般的な方法であったが、「行事」に関しては効果的

「公共施設」は図書館などの利用、「行事」はお正月や

な学習方法が難しいのであろうか「伝承したいが授業で取り扱っていない」という状況である。

⑤地域素材を授業で利用した感想

図14より、地域素材を使った人全員が「意義があった」と答えており、「その理由に生徒たちが興味・関心があり、意欲的に取り組めた」と答えている。この結果は大変興味深く、地域素材の導入・活用の必要性が捉えられたといえよう。

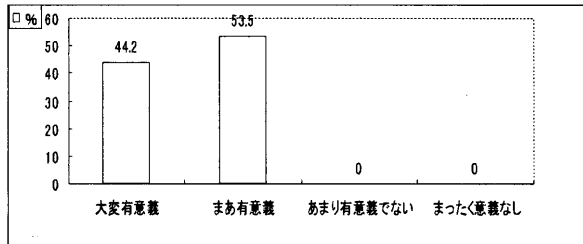


図14 地域素材活用の感想

⑥今後の授業での地域素材の活用

図15では「今後授業で地域素材を利用しようと思うか」という問いに60%が「思う」と答えており、関心は高いといえるが、その一方で10%が無回答であった。これは、「利用したい気持ちはあるが、実際に利用するときのことを考えると問題も多くどちらともいえない」ということと推察される。以下の調査結果からそのあたりを探ってみる。

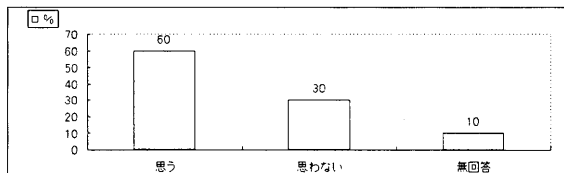


図15 地域素材活用の予定

「今後授業で地域素材を利用しようと思う」と答えた人の地域素材利用の目的についての回答結果を図16、図17に示す。また、地域素材の方法については図18、図19に示した。

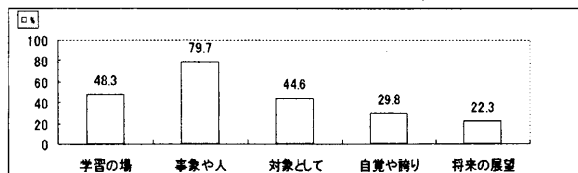


図16 地域素材利用の目的

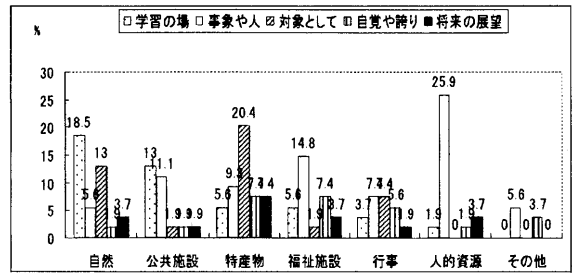


図17 素材の種類別利用目的 P<0.005

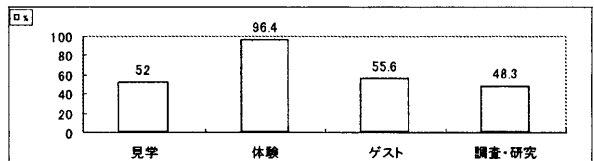


図18 地域素材利用の方法

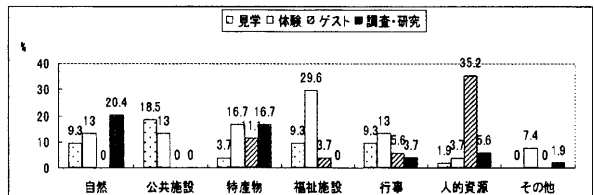


図19 素材の種類別利用方法 P<0.005

どのような考えで地域素材を利用したいかを尋ねたところ、「事象や人たちから教わる」と答えた人が約8割と最も多く、実際に授業をした人たちの目的であった「対象として」や「学習の場」を大きく上回った。これは学校サイドだけで地域素材を活用して授業するのではなく、地域の人などからの協力や支援を求め、地域との連携の表われではないかと思う。

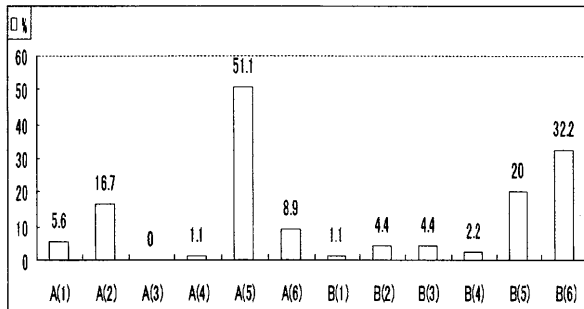
このことは図18からも明らかで、「ゲストティーチャーとして専門家を招く」が「見学」や「調査・研究」を上回っており、外部からの支援によって地域素材を扱った授業を行いたいと考えている。図19を見ると、福祉施設で体験をさせたいが30%で、人的資源のゲストティーチャー同様多い傾向である。実際に授業をした人は「特産物」を取り入れた「体験」学習が16.3%と多い傾向に対し、今後の希望としては「体験」と共に「調査・研究」もしたいと考えられている。このことは、一時的な体験で終わらず、歴史や未来を視野に入れた総合的な「特産物」の学習が必要と考えていると解釈できる。

「今後地域素材を授業で使おうと思わない」30%の人にその理由を聞いてみると「教材を準備する時間がない」との答えが最も多く約4割を占めていた。その他の意見としては「現時点でアイデアが浮かばない」とか「授業時数が減ってきたため、基礎基本をおさえるだけで時間がかかる」といったものがあった。

「興味がない」とか「必要ない」というわけではなく、時間的なことや内容的なことに課題があるようである。

⑦今後の授業における地域素材の取り上げ方

以下の設問は、授業で地域素材を取り上げるという前提のもとに質問をした。



(A (1) ~ B (6)) は学習指導要領に示された家庭科の内容項目)

図20 地域素材を導入したい家庭科の分野

図20より、家庭科の時間で地域素材を扱うとすれば、A(5)の食生活の課題と調理の応用が良いと答えた人が半数以上を占めていた。この領域では「日常食や地域の食材を生かした調理の工夫ができること」という内容になっており、地域の食材という点で、地域素材を扱うことが容易である。次いでB(6)、B(5)となっているが、B(6)は「地域の人々の生活に関心を持ち、高齢者などの地域の人々とかかわることができる」と「環境や資源に配慮した生活の工夫について、課題をもって実践できる」が内容となっており、これも、老人ホームや自然環境など地域素材を取り上げることに繋がる。B(5)は「幼児の生活に関心を持ち、課題を持って幼児の生活に役立つものをつくるができる」や「幼児の心身の発達を考え、幼児との触れ合いやかかわり方の工夫ができる」という内容で、地域の保育園などを訪問して幼児と接することにより、地域素材を利用することに無理がないと思われる。

このように、家庭科の領域で地域素材を利用する内容分野は多様にあることから、図21のように地域素材を扱いやすい教科の上位に選ばれていると考えられる。

しかし、図22を見ると、最も地域素材を取り入れやすい時間は「総合的な学習の時間」の答えが最も多く、7割以上も占めている点は非常に注目すべき点で、これまでも述べてきたように、「地域素材を扱いたい」という希望があるにもかかわらず、時間的・内容的な課題が多いため、それに踏み切れない。そこで、「総合的な学習の時間で地域素材を扱えばよいのではないか」という思いがうかがえる。

また、一方で「家庭科の時間に地域素材を取り入れるべきだ」と考えている人が約8割近くもいる。勘案すると「総合的な学習の時間」と「家庭科」をうまく

組み合わせて地域素材を活用しながら家庭科の基礎・基本も習得させる教材作りが今後の一つの課題といえるのではないだろうか。

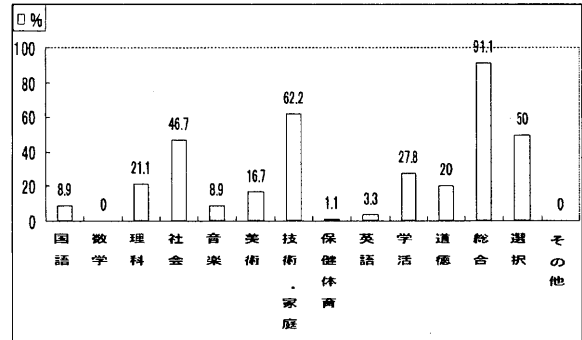


図21 地域素材を扱いやすい教科や時間

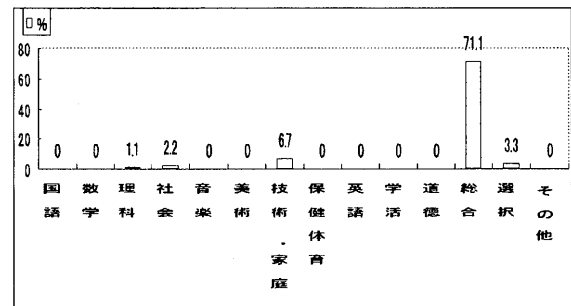


図22 地域素材を最も取り入れやすい教科や時間

(6)「地域素材への興味・関心」の有無との関連から地域教材への興味・関心の有無と地域素材に関する項目との関連をみる。

図23より地域素材に興味・関心がある人ほどスローフードという言葉をよく知っているという傾向がみられた ($P < 0.05$) が、それらはまた、スローフードという言葉を知り、それに賛同して地域素材に興味を持ったというケースとも考えられる。

また、図24、図25、図26より「地域素材に興味・関心がある」人ほど「伝統行事を体験させたい」「伝統的な技術も伝承させたい」 ($P < 0.05$) と思っており、実際に「生活技術を伝承している」と思っている傾向が捉えられた。

図27は「地域素材に興味・関心があるかどうか」と「今後家庭科の授業で地域素材を扱うべきかどうか」を尋ねた結果である。これをみると、「興味・関心がかなりある」人は全員「地域素材を扱うべきだ」と考えている。

なお、「興味・関心があまりない」人でも「少しある」人と同じ7割くらい「地域素材を取り入れるべき」と考えており、全体としての地域素材導入への期待が捉えられる。

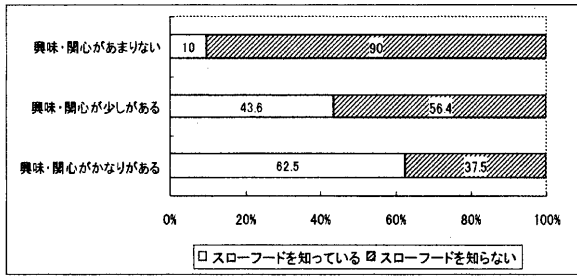


図23 地域素材への「興味・関心」と「スローフードの知識」 $P < 0.05$

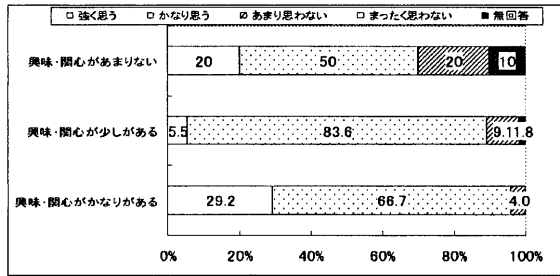


図24 地域素材への「興味・関心」と「生徒に伝統的な行事を体験させたい」 $P < 0.05$

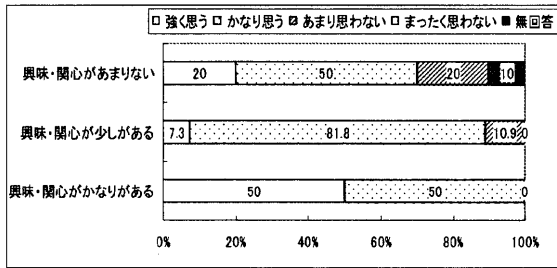


図25 地域素材への「興味・関心」と「生徒に伝統的な技術を伝承させたい」 $P < 0.005$

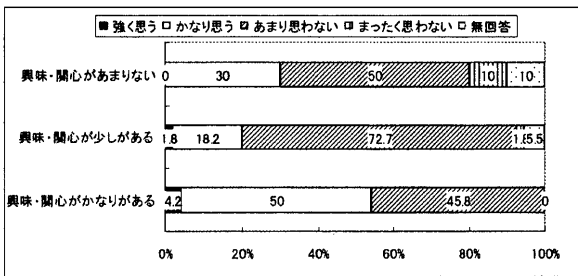


図26 地域素材への「興味・関心」と「生徒に生活技術を充分伝承している」

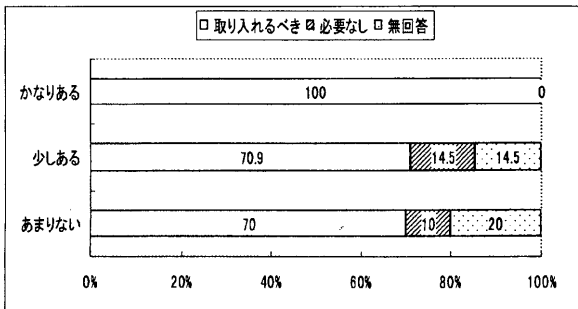


図27 地域素材への「興味・関心」と「地域教材を取り入れるべき」

(7) 家庭科免許の有無との関連から

家庭科の免許の有無と地域素材に関する設問項目との関連を検討をした。図28、図29をみると免許有のほうが「生徒に伝統的な行事を体験させたい」、「生徒に伝統的な技術も伝承させたい」と考えている傾向が見られた。しかし、図30をみると、免許有のほうが「生徒に生活技術を充分伝承しているとは思えない」との答えがやや多く ($P < 0.05$)、評価が厳しい。図31を見ると、免許有のほうが授業で地域素材を使った経験が多いといえる。また、図32と図35を比べてみると、免許有は、「地域素材を使うべきだとは思いますが、実際に自分が授業をするとなると使わない」と回答している。「免許有」の錯そうしているように思われる回答結果は、家庭科において培いたい「基礎・基本の学力」と「地域素材導入」がつながるか否かには整理・工夫しなければならない問題があるということであろう。

図33と図34を見ると、家庭科の免許を持っている人も地域素材を利用するのは「総合的な学習の時間」が一番扱いやすいと考えており、導入の難しさが伺える。

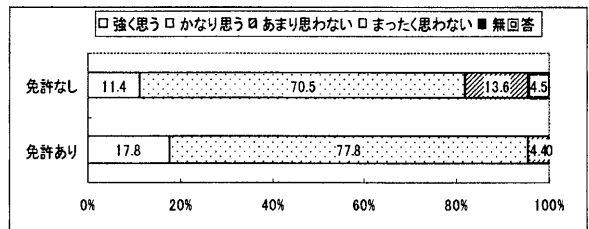


図28 「家庭科の免許の有無」と「生徒に伝統的な行事を体験させたいか」
($p : n.s$)

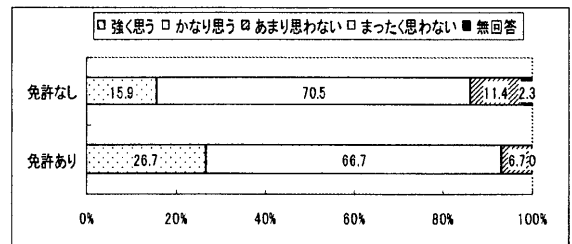


図29 「家庭科の免許の有無」と「生徒に伝統的な技術を伝承させたいか」
($p : n.s$)

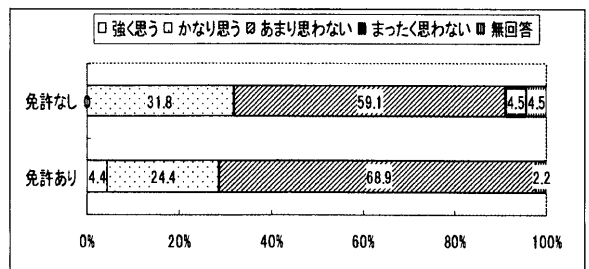


図30 「家庭科の免許の有無」と「生徒に生活技術を充分伝承しているか」
($P < 0.05$)

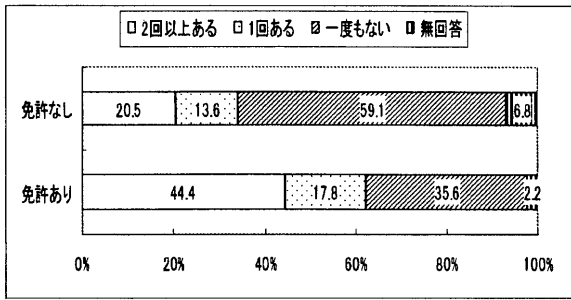


図31 「家庭科の免許の有無」と「今までに地域素材を授業で使ったことがあるか」(P<0.05)

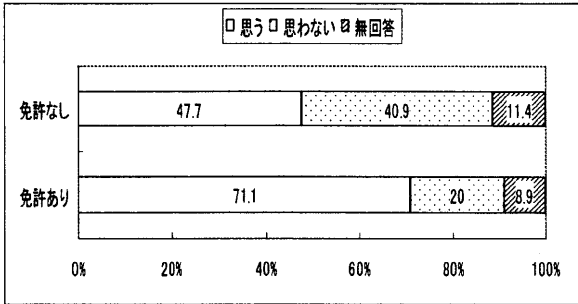


図32 「家庭科の免許の有無」と「今後授業で地域素材を利用しようと思うか」

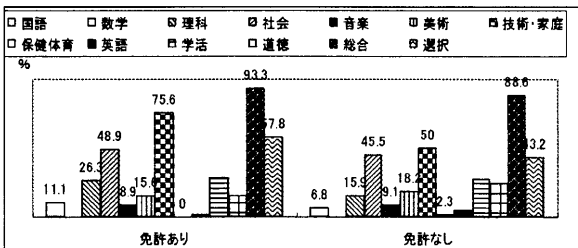


図33 「家庭科の免許の有無」と「地域素材を扱いやすい教科や時間」

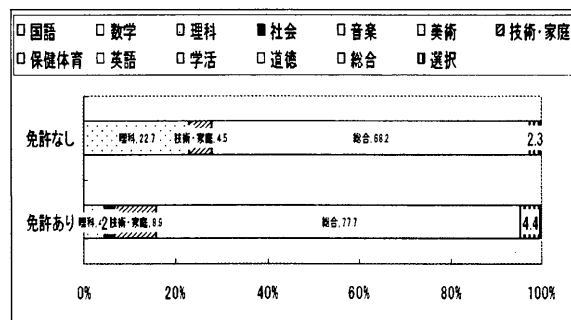


図34 「家庭科の免許の有無」と「最も地域素材を扱いやすい教科や時間」

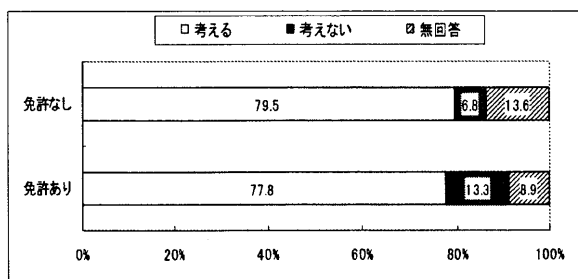


図35 「家庭科の免許の有無」と「家庭科で地域素材を取り入れるべきと考えるかどうか」

(8) 地域別(紀北・中紀・紀南の地域)との関連

和歌山県全体で集計・検討してきたが、紀北(和歌山市地方、海南・海草地方、那賀地方、伊都・橋本地方)、中紀(有田地方、日高地方)、紀南(西牟婁地方、東牟婁地方)の3つの地域に分けて、地域的な特徴があるかどうかを検討する。(初めに、和歌山県の教育的区分(教育事務所の所在地を中心に考えたもの)に基づいて、和歌山市地方、海南・海草地方、那賀地方、伊都・橋本地方、有田地方、日高地方、田辺・西牟婁地方、新宮・東牟婁地方の9つの地域で検討したが、地域的な特徴は現れなかった。)3地域は産業的な特徴もあり、紀北は柿、桃などの果物の生産地、中紀は和歌山を代表するみかんと梅干の生産地、そして紀南は主に漁業を中心とした産業が発達した地域という分類になっている。回収数は図36に示す。

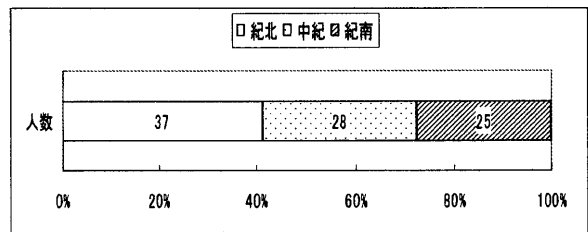


図36 3つの地域の内訳

図37をみると、免許を持っている人の割合が紀北と紀南で逆であり、そのほぼ中間が中紀という注目すべき結果が出た。紀南地方の68%の人が免許を持たず、家庭科を担当している現実が浮き彫りになった。図38で特徴が現れたのは、紀北地方で「特産物を知らない」と答えた人が中紀、紀南よりも多く見られたことである。また、図39と比べてみると、紀北、中紀の人は、勤務地域より居住地域の特産物を知っている傾向があるのに対し、紀南地方の人は居住地域より勤務地域の特産物を知っている人が多い。これらが、授業への取り組みにつながっていくのではないかと思ったが、図40をみると、授業の経験に大きな差異は見られなかった。図41を見ると、紀南は「自然」「公共施設」「福祉施設」の内容を授業で取り扱った人が、中紀、紀北に比べて少なく、「行事」や「人的資源」を取り扱った人が多く見られた。

図42で「スローフード」という言葉については紀南の人は半数以上が「知っている」と答えているのに対し、紀北の人は約6割が「知らない」と答えており、「スローフード」は紀南地方でより認識されていた。なお、図43より、今後授業で地域素材を利用しようと思っている人も紀南地方のほうが多い。さらに図44からも、紀南地方の人々がこれからの地域素材の必要性をより感じていることが捉えられた。

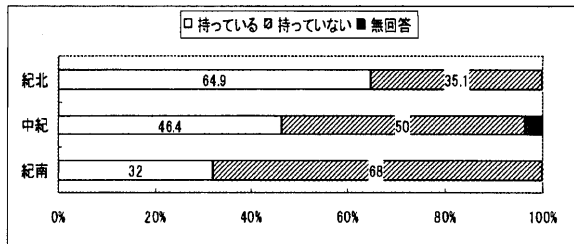


図37 「3つの地域」と「家庭科の免許の有無」

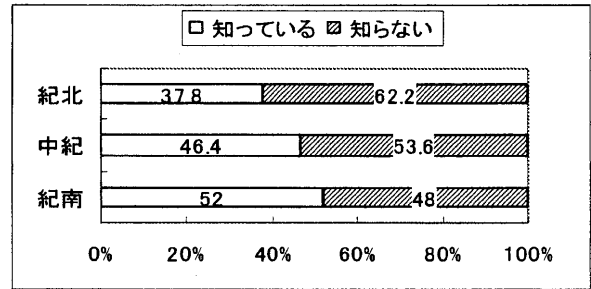


図42 スローフードという言葉を知っていますか

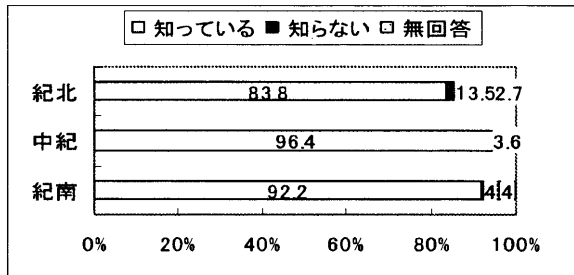


図38 居住地域の特産物を知っていますか

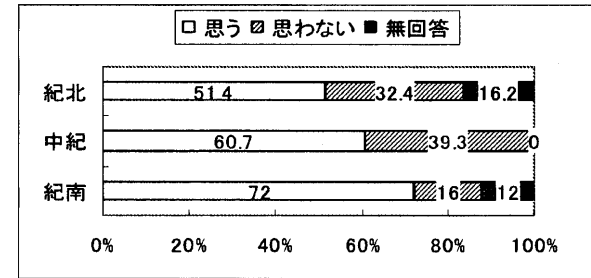


図43 今後授業で地域素材を利用しようと思いますか

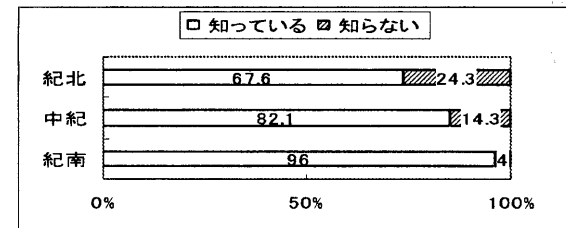


図39 勤務地域の特産物を知っていますか

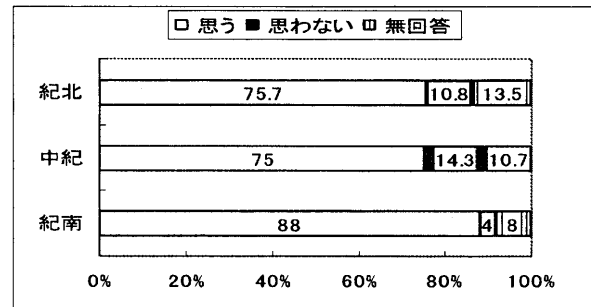


図44 今後家庭科に地域素材を取り入れるべきだと考えますか

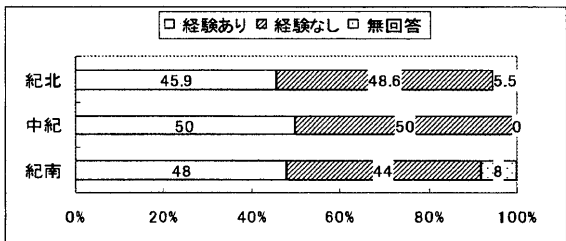


図40 授業で地域素材を使ったことがありますか

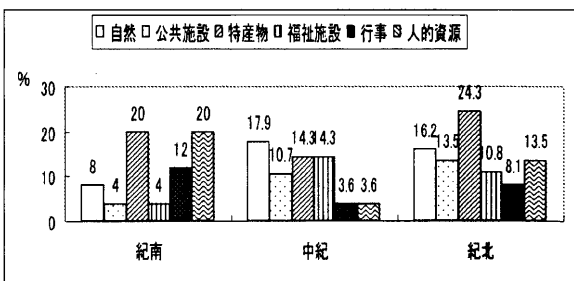


図41 授業で使った素材の種類

V まとめ

以上の結果を要約する。

(1) 基本的属性

年齢については55歳から60歳と30歳から34歳が少ないものの、その他の年代はほぼ15%前後おり、あまり年代に偏りがなかった。性別は女性がほとんどで、男性はわずか3人であった。しかも、3人とも他教科の専門であるが、学校の事情により家庭科も担当しているという状況であった。

(2) 「地域素材に対する意識・実態」と教師の居住地

「地域行事への参加率」も「公共施設の利用頻度」も「特産物の知識」もすべて「勤務地域」より「居住地」の方が高い値を示していた。つまり、仮説1は立証されたといえる。とはいえ、それぞれの行事への参加率は非常に低く、「一度も参加したことがない」と答える人が半数を超えるものもあった。このことは柳の調査2)でも同様の結果が出ており、教師の地域参加が少ないことも意味している。地域素材を活用するの

であれば、教師の地域参加が不可欠であることが確認された。

(3) 家庭での年中行事とその実施状況

家庭での年中行事については、30項目の行事のうち14項目が約8割の実施状況であった。特にお正月に関する行事の実施率が大変高く、中でも「お雑煮を食べる」は100%の実施率となっていた。1年を通して、行事食の実施率が高く、7割を超えていて、家庭行事の実施状況は行事食を中心とした行事の実施に代表される。

(4) 「伝統行事」・「生活技術」と教師の意識

9割ちかくが「伝統的な行事を体験させたい」「伝統的な技術を伝承させたい」と答えており、科学技術の発達や利便性・効率化が叫ばれる中で、伝統として後世に受け継いでいくべきもののあることを痛感する。

が、一方で「生きる力」を育むために必要な「生活技術を十分教育しているとは思わない」が63.3%あり、大きな課題が捉えられた。

伝統の継承を検討しつつ、生きていくために必要な生活技術をどう身に付けさせるかの追究が必要とされる。

(5) 地域素材と家庭科授業

地域素材への興味・関心が「かなりある」と「少しある」を合わせると9割近くを占めている。また「まったく興味がない」と答えた人は一人もおらず、家庭科教師の「地域素材への興味・関心」はかなり高いという結果を得た。

今まで地域素材を使って授業をしたことがあるという人は5割近くおり、そのうち2回以上使った経験のある人は32.2%であった。2回以上使った人が多いということから地域素材は大変魅力があり、活用方法によっては大きな成果があるのではないかと推察する。

そこで、その実態を分析したところ、全員が「地域素材を使うことに意義があった」と答えており、その理由として「生徒たちが意欲的に取り組めた」、「地域との交流ができた」を挙げている。このことから、地域素材の活用は、家庭科の授業を進めるにあたって大変重要な役割を持ち、成果をもたらしてくれるものと思われる。

3割が「今後地域素材を授業の教材として利用しようと思わない」と答えている。「地域素材に興味・関心がある」ものが9割近くいたことを考えると「興味があっても使おうとは思わない。」ものが多くいることがわかる。その理由は「準備時間がない」と「内容に時間がかかる」など時間的なことを理由に挙げているものが約6割であった。その他の意見としても「家庭科の授業では基礎・基本をおさえるだけで精一杯」、「地域素材を使うアイデアが浮かばない」など現実に授業で使う際の問題点が浮き彫りになった。そして、一番地域素材を取り扱いやすい領域としてはA(5)の食生

活の課題と調理の応用やB(6)家庭生活と地域のかかわり、B(5)幼児の生活と幼児との触れ合いがあげられていた。扱いやすい教科については、「総合的な学習の時間」が91.1%あるが、「技術・家庭」も多く62%ある。このことから、今後、地域素材を活用する場合、総合的な学習の時間と連携した技術・家庭科の授業内容として考えることが有効ではないかと思われる。

(6)「地域素材への興味・関心」の有無との関連から地域素材に興味・関心がある人ほどスローフードという言葉を知っているという結果が出た。スローフードの運動の根本が地域の食材にあることから「地域素材」と「スローフード」には密接な関係があると思われる。

地域の行事に参加したことがある人は一度も参加したことが無い人に比べて「地域素材に興味・関心がある」と答えている。このことから、仮説2は、立証されたと考えられる。

「地域素材に興味・関心はかなりある」方が「伝統行事を体験させたい」と思っており、「伝統技術も伝承したい」「生活技術も伝承している」と思っている傾向がある。また、実際に授業で地域素材を使った経験を聞くと興味・関心はかなりある人で2回以上使ったことがある人が7割おり、仮説4は立証されたといえる。

家庭での年中行事との関係を見てみると、実施率との関係にあまり差異がなく、仮説3は実証されなかった。一方、地域素材に興味・関心がある人は全員家庭科で地域素材を扱うべきだと思っており、仮説5は立証された。

家庭科の免許については、約半数の人が免許を持たずに家庭科を担当しているという大きな課題を抱えている。免許を持っている人が地域素材に興味・関心もあり授業で活用したいと多く思っているが、積極的に取り入れようとはしていない点に多くの課題が存在する。紀南では勤務地の特産物について知っている人が大変多く、地域の素材を使った授業の経験こそ少ないが、スローフードという言葉をよく知っている人も、今後地域の素材を授業で利用する人も、紀北・中紀より多いという結果は興味深い。

家庭科担当の教員は地域素材には興味・関心があり、授業でも使いたいと思っているが、現実に授業で地域素材を扱うとなると、準備期間がなかったり、地域の素材選びが困難だったり、また、授業自体に時間がかかりすぎる。といった理由からなかなか積極的にというわけには行かないことが捉えられた。これは長石⁷⁾のいう「地域に根ざした家庭科教育の問題点は、1つには典型的な題材が見つからないことが少なくないこと、2つには教材研究に手間ひまがかかること等」と合致している。

地域の素材を一番扱いやすい教科・時間は「総合的な学習の時間」と答えている人が多数いることから、

総合的な学習の時間に家庭科の内容を組み込む方向の検討や、さらに、教師の居住地域よりも勤務地域の地域参加が低いことから、地域の素材を使った授業を目指すのであれば、教師の勤務地域参加が不可欠であることが確認された。

以上により、「勤務地域で大いに地域参加をし、地域とのつながりをつくる。」「1つの教材で、いくつもの基礎・基本を学習させられるものを探す。」「総合的な学習の時間に家庭科の内容を組み込む」が家庭科の授業で地域素材を扱うための手立てとなるのではないかと考える。今後、さらに、中学生の意識・実態調査を行い、課題を追究していきたいと考えている。

引用参考文献

- 1) 教育総研 第五回 教育文化フォーラム 第一セッション
- 2) 柳 昌子 家庭科における「地域」の教材化(Ⅱ)―教師の地域参加と教育実践―
福岡教育大学紀要 第26号 第5分冊 1977
- 3) 柳 昌子 家庭科における「地域」の教材化(Ⅲ)―教師性の発達と「地域」―
福岡教育大学紀要、第27号、第5分冊 1977
- 4) 柳 昌子 家庭科の地域教材
―学校と地域の関係の変化から―
「年報・家庭科教育研究」第28集 2002年11月
- 5) 田結庄 順子 戦後家庭科教育実践の実証的研究(第2報)
―地域に根ざす家庭科教育と科学的生活認識の育成(その1)―
年報・家庭科教育研究 第22集 大学家庭科研究大会 1996
- 6) 真部 真理子・橋本 慶子
年齢層による年中行事の認知と実施状況の相異
日本家政学会誌 Vol.53 No.5 (2002)
- 7) 長石 啓子 地域に根ざした家庭科教育の研究
兵庫教育大学紀要 (2001)